

いのちの御霊の支配 (1)

【聖書箇所】 8章 1～11節

はじめに

●ローマ人への手紙 8章は、聖書の中で実にすばらしい章の一つです。なぜなら、聖書の中で最高峰の神の恵みを提示しているからです。この章には神の恵みにあずかっている喜びが満ち溢れています。8章の最初のことは、「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理からあなたを解放したからです。」・・・そして、8章の最後のことは、「どんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」・・・なぜなら、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのこと(患難、苦しみ、迫害、飢え)の中にあっても、圧倒的な勝利者とされているからです。

●ところで、7章では「私には、自分のしていることがわかりません。」「私は、私のうち、すなわち私の肉のうちに善が住んでいない。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、・・・」というふうに、私、私のうちに、自分が、自分で、ということばが実に多く(ある人は41回)出て来ます。それに引き換え、8章では「御霊」(霊)ということばが20回以上も出てきます。主体は私たち人間ではなく、神の御霊にあります。

●7章では、新しく生まれ変わった一人のキリスト者が、自分の力で神のみこころを行なおうとして、その戦いに敗れてしまった自己破産の叫びを聞きました。「私は、本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と。しかし、8章で御霊に支配され、御霊に導かれているキリスト者の喜びの声を聞くことができます。今回は、8章 1～11節の箇所を通して、第一に、キリストのうちにある対立する二つの力について、そして第二は、キリスト者が取りうる二つの態度についてお話したいと思います。

1. キリスト者のうちにある対立する二つの力

●私たちは主イエス・キリストを信じることによって、新しく生まれた者です。神のみこころは、私たちキリスト者が本当の意味において、キリストにある新しいいのちの生活をする事です。しかし7章で学んだように、私たち自身の力によっては、そのような新しい生活をする事はできないことを見ました。つまり、善をしたいと思うけれども、その力が私のうちにはないということです。その私とは、未信者のことを指しているのではなく、主イエスを信じて、主を愛して、主に従っていこうとする信者を指しています。しかしその信者の最善の努力もむなしく、結局は敗北に終わってしまったということです。

●ところが8章に入ると、それができる。できる者とされているということを見るのです。それは、キリ

スト・イエスにあるいのちの御霊が信じる者の中にあって、その力が現わされるならば、です。私たちはすでに主イエスを信じて受け入れた瞬間に、力強い助け手を自分の内に宿しているからです。

●8章2節をもう一度読んでみましょう。

「なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。」—この二つの原理、ひとつは「いのちの御霊の原理」、もうひとつは「罪と死の原理」です。「原理」と訳された「ノモス」(νόμος)は、いつでも決まった働きをする力、法則のことを言います。ですから、キリスト者がこの二つのどちらに従うかが大切な点となります。ここで原理ということばを「支配」という言葉で言い換えることもできます。もし私たちが罪の支配の下に立つならば、必ず罪を犯すしかありません。しかしいのちの御霊の原理、つまりいのちの御霊の支配の下に立つなら、罪の支配から解放されることができるのです。

●キリスト者といえども、心の中に対立する二つの力が働いています。その力のひとつは「罪の力」です。そしてそれに対するものとしての「御霊の力」、この二つです。たとえば、エレベーターに乗ったことを考えてみてください。エレベーターには二つの力が働いています。一つはエレベーターを下に落とそうとする力です。引力の法則です。もうひとつの力は、そのエレベーターを上を持ち上げようとする力です。その力の原動力は電力です。その電力の力が下へ落ちようとする力に打ち勝って、エレベーターを持ち上げてくれるのです。ここで大切なことは、引力の力は絶えず働いているということです。引力の法則は常に働いているのですが、それよりもずっと強い力が働くことで、引力の法則の働きを打ち消すことが可能です。同様に、キリスト者もこの世にいる限り、罪の力は働き続けます。けれども、御霊の力が働くことで、罪の力は打ち消されるのです。ですから、御霊の力に導かれるならば、本当に新しい生活へと私たちを導いてくれるのです。

●罪の力は、私たちが善をしたいという願いよりも大きな力なのです。このことを決して忘れてはならないのです。パウロはこの罪の力について、7章で力説しました。善をしたいという思いはある、しかしそれをなす力が私たちの内にないという自覚、その経験が大切です。「私はみじめな人間です。」という自己破産の告白です。しかしこのように告白する者に対して、8章では御霊の方から「私が助けます」と言っているのです。7章では信者の方が「私は善をしたい」と願っている。ところがその願いにもかかわらず、できないのです。ところが8章では、御霊の方から「私が善をさせてあげます」と言っているのです。

●ある足の不自由な方が、ぜひ一度富士山に登ってみたいと思っていました。当然、自分の力では登ることができません。ところが、その話を聞いたある人々がぜひその願いをかなえてあげたいということから、その方々の助けによって、足の不自由な人は富士山に登ることができたという話を新聞で読んだことがあります。その人にとって何という喜びであったことでしょうか。このようなことがキリスト者の人生に起こるのです。多くの荷物を運ぶことのできる貨車はそれ自体何もすることができませんが、機関車と連結することによってはじめて動くことができ、ある目的地へと運ぶことができます。同様に、私たちキリスト者も御霊という機関車によって力を受け、運ばれていくことができるのです。このように、新しく生ま

れ変わった人は、御霊とともに生きる、御霊とともに働くということが大切なのです。

●ここで、いくつかのことをまとめておきたいと思います。

- (1) 「肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされる。」(8:4)
- (2) 「肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。」(8:5)
- (3) 「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。」(6節)

●肉の性質は神に反抗するのです。神の律法に服従しようとしません。したがって、神を喜ばすことができません。

2. キリスト者が取りうる二つの異なった態度について

●新しい人(私たち)は神のみこころを行なおうとしますができません。なぜなら、それは罪の力の方が私たちの願いよりも強いからです。しかし神が与えて下さる御霊だけが、私たちの願っていることを実際に行なわせることのできる唯一の方なのです。ですから、私たちが自分の力でなんでもやろうとするか、それとも御霊のご支配に自分自身をゆだねることができるか、それに明け渡すことができるかどうか、ということが最も大切なこととなります。事実、御霊のご支配に自分自身を明け渡すことのできる人は、ただ自己破産を体験した人だけであるということはありません。心のどこかで少しでも自分の力でできている人は、御霊の力を体験することはできないのではないのでしょうか。どちらの態度をとるかによって、私たちが肉적인キリスト者となるか、霊的なキリスト者となるかが決まってしまうのです。

●9節には「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。」と書いてあります。すべてのキリスト者はすでに御霊の住まわれる宮です。しかし、御霊が私たちのうちにただ住んでいるということと、私たちのうちに住んでおられる御霊が実際に力をもってその支配を現わしてということとは、別の問題なのです。たとえば、御霊の最も大きな働きは何かというと、ただ主イエス・キリストの栄光を現わすことです。私たちをして、御霊は主イエスの栄光を求めさせます。ですから、もし私たちが、自分自身のために何かを求めることは御霊に敵対することになります。自分の求めることが、主イエスの栄光につながるのかが問われます。そのつながりなしに何かを求めるなら、御霊はあなたを支配することができなくなるのです。しかし自分を否定し、御霊と同じように主イエスの栄光だけを求めるならば、御霊の支配を体験することができます。そして「いのちと平安」に満たされた生活をするようになるのです。

●もし私たちが御霊の支配に自らをゆだねないなら、自動的に肉の思いへと流されていきます。肉の力には勝てないからです。この御霊は「キリスト・イエスにある御霊」とあります。主イエスが公生涯に入ら

れた時に、ヨルダン川でバプテスマのヨハネから洗礼を授けられました。そのとき、天が裂けて、御霊が鳩のようにくだった」と記されています。この時から、イエスは御霊に導かれて荒野の試みを通せられました。それは人間が遭遇する問題に対して勝利するためです。使徒の働き 10 章 38 節にはこう記されています。「神はこの方(ナザレのイエス)に聖霊と力を注がれました。・・(それゆえ)イエスは、巡り歩いて良いわさをなし、また悪魔に制せられているすべての者を癒されました」。イエスは聖霊に助けられて、最後まで従順な生涯を送ることができ、その結果、私たちにとこしえの救いをもたらすことができたのです。この同じ御霊が私たちのうちにすでに注がれているのです。「御霊に導かれて」ということは、イエス自身も御霊のご支配におゆだねになられたことを意味しているのです。私たちも同じく御霊のご支配にゆだねたいものです。

●世界の大伝道者、ビリー・グラハム師はこんなたとえを書いています。

「あるエスキモーの猟師が、毎土曜の午後に、二頭の犬を連れて町へやって来ました。一頭は白犬で、もう一頭は黒犬でした。犬は命令によって闘うように訓練されていました。いつものように土曜の午後になると、町の広場に人々が集まって来ました。犬に闘わせ、人々はみなその闘いで賭けをするのです。ある土曜には黒犬が勝ちました。別の土曜には白犬が勝ちました。しかしそのエスキモーの猟師はいつも賭けに勝ちました。そこで人々は聞きました。どうやって勝ち犬を当てるのか、と。その猟師は言いました。「一頭は腹を空かせておいて、もう一頭には餌をやる。俺が餌をやった方の犬が強いからいつでも勝つんだよ。」

●私たちのうちには御霊と肉という二つの性質があることはすでに学びました。私たちのうちにあるこの二つが首位を争っています。どちらが私たちに支配するのか、それは私たちがどちらに餌を与えるかによるのです。御霊か、肉か、そのどちらに餌を与えるのかが勝敗を決めるということなのです。「キリスト・イエスにあるいのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放し」ているのですが、どちらの原理に私たちが餌を与えるのかによって、勝敗が着くのです。

1995.2.05

【付記】・・「御霊」と「聖霊」という語彙について

●「御霊」も「聖霊」も同じお方を指しますが、表記が異なります。「御霊」はギリシア語で「プニューマ」(πνεῦμα)ですが、「聖霊」は「プニューマ・ハギオス」(πνεῦμα ἅγιος)と表記します。「ハギオス」(ἅγιος)とは「聖なる」の形容詞。これを英語、およびヘブル語で表記すると、以下のようになります。

「御霊」・・英語では the Spirit, ヘブル語では「ルーアツハ」(רוּחַ)。

「聖霊」・・英語では the Holy Spirit, ヘブル語では「ルーアツハ・ハツコーデツシュ」(רוּחַ הַקֹּדֶשׁ)。

●「御霊」は新約聖書全体で 150 回。うちローマ書では 19 回、うち 8 章では 13 回。

「聖霊」は新約聖書全体で 93 回。うちローマ書では 5 回です。8 章では使われていません。